「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 110 回

『「動ぜず、飛び出す勇気」 ～ 「間断なき努力の心得」～ 』

2022 年 5 月 21 日 恵泉女学園同窓会のホームカミングデーに出席した。「会の中で来賓のご紹介をいたします。 その際に、会長より先生に一言ご挨拶をお願いしたいとのことでございます。」との連絡があった。 筆者は、【1898 年、新渡戸稲造（1862-1933）は恵泉女学園創立(1929 年)者の河井道(1877-1953)先生に「日本にも偉い人はいます。 しかし祭り上げられています。 ところがアメリカでは台所に、学校に、人生のあらゆる ありふれた路上でみつけられるのです。 日本では偉い人物というものを地位の高い人とか、家柄の良い人とか、大学者だけのなかに探す傾向があります。 実に素晴らしい人たちが、見落とされていることがよくあるのです。】と さりげなく語った。 今回、卒業生の柚木麻子 氏の講演『らんたんの光をシュアしよう』を拝聴した。 昨年 11 月 柚木麻子 氏の『らんたん』（小学館）（画像 1）を拝読した。 天璋院篤姫(1836-1883)の【「虎かーー。 よし、そなたの息子の名前は、虎児と名付けよう。 虎穴に入らずんば、虎児を得ず、のトラジじゃ。 つまり、危険や不安があっても決して動ぜず、新しい世界に飛び出す勇気がなけらば、一番大切なものには出会えない。 つまらない見栄を守って 閉じこもってばかりの男は畢竟、何も得られんからな」】が、今回 鮮明に蘇ってきた。

2022年5月22日午後は、2008年から始めている『東久留米がん哲学外来 in メディカルカフェ』(東久留米市 市民プラザ スペース105)にwifeと赴いた。 個人面談もあり、貴重な時となった。 最新号のニュースレターも配布された(画像2)。 来年は、『15周年記念シンポジウム』が企画される予感する。 その後は、同じ会場で、2007年からスタートした『読書会』であった。 【新渡戸稲造『武士道』(岩波文庫、矢内原忠雄 訳)と内村鑑三『代表的日本人』（岩波文庫、鈴木範久 訳)を交互に読み進めております。 樋野先生のユニークでわかりやすい解説と さり気なく語られるメッセージに励まされ、人生の生きる意味を あらためて考えるひとときになります。】と紹介されていた。 今回は、内村鑑三『代表的日本人の上杉鷹山』の２章『人と事業』であった。 「―― 目の前の小さな炭火が、今にも消えようとしているのに気づいた。 大事にしてそれを取り上げ、そっと幸抱強く息を吹きかけると、実に嬉しいことには、よみがえらすことに成功した。――」が、今回は心に沁みた。 読書会終了後は、皆様と落合川を散策した。 「間断なき努力の心得」の学びの日曜日となった。

らんたん
柚木麻子

photo: Kozue Maeda

photo: Maki Tsunoda

photo: Yukimon

「人生邂逅」
～『何を学ぶか』より『誰に出会うか』　～

樋野 興夫
恵泉女学園 理事長
順天堂大学 名誉教授
新渡戸記念中野総合病院 新渡戸稲造記念センター 長
一般社団法人 がん哲学外来 理事長

この度、『心のSpring Water（湧き水）』11号の原稿を依頼された。2021年10月24日発行の冊子『OKI-chan's Journey to Memorable Words; OKIちゃん 言葉の旅』（英語・日本語版）は大変好評の様である。「1919年パリ講和会議が開催されている頃、『スペインかぜ』がフランスでも猛威をふるっていて、パンデミック（世界流行）で、感染者6億人、死者4,000万～5,000万人にも達したと推定されている」と、以前に聞いたものである。そのとき、新渡戸稲造（1862-1933）はパリにいて、その後、国際連盟事務次長に就任している。新渡戸稲造は、「common sense（社会常識）を備えもった柔軟性のある人格者」と謳われている。「コロナ時代の生き方」が問われている現在、新渡戸稲造なら、何と語るのであろうか？『何を学ぶか』も大事だが、それ以上に『誰に出会うか』がもっと大切であろう。英文で書かれた『代表的日本人』（内村鑑三; 1861-1930）と『武士道』（新渡戸稲造）は、若き日から私の座右の書となった。そして、南原繁（1889-1974）と矢内原忠雄（1893-1961）へと繋がっていった。「人生邂逅」の「非連続性の連続性」である。これが、まさに「『心のSpring Water（湧き水）』ではなかろうか！

"Life encounter"
—"Who to meet" rather than "What to learn"—

This time, I was asked to write an article for the 11th issue of "Spring Water from the Heart". The booklet "OKI-chan's Journey to Memorable Words" (Eng-Jp bilingual ver.,) published on October 24, 2021 seems to have been very well-received. "Around the time of the Paris Peace Conference in 1919, the 'Spanish flu' was also rampant in France, with a pandemic of 600 million infected and 40-50 million presumed dead, " I heard earlier. At that time, Inazo Nitobe (1862-1933) was in Paris and later became the Deputy Secretary-General of the League of Nations. Inazo Nitobe is touted as "a flexible personality with common sense." Now that "the way of life in the COVID-19 pandemic era" is being questioed, what would Inazo Nitobe say? "What to learn" is important, but more important than that is "who to meet". "Representativ Men of Japan" (Kanzo Uchimura; 1861-1930) and " Bushido: The Soul of Japan " (Inazo Nitobe) writte in English have become my favorite books since I was young, which led to Shigeru Nanbara (1889-1974) and Tadao Yanaihara (1893-1961). It is the "continuity of discontinuity" of the "life encounter". Isn't this exactly what "Spring Water from the heart" is?

Okio Hino, M.D., Ph.D.
Chairperson, Board of Trustees, Keisen Jogakuen
Emeritus Professor, Juntendo University
Director of Nitobe Inazo Memorial Center,
Nitobe Memorial Nakano General Hospital
Chairman of the Board of Cancer Philosophy Clinic